

＜エムディ先生の紹介＞

エムディは、愛着理論で有名なジョン・ボウルビーJohn Bowlby博士と同時代に活躍し、「3か月微笑」「1歳半のNo!」の現象を発見したコロラド大学教授ルネ・スピッツRene Spitz博士*の直弟子です。

スピッツは、もし乳児が依存対象から切り離されたままでは、発達が歪み止まり、「愛情剥奪症候群」や「依存的抑うつ」などの病態、さらに死に至ることがあることを実証しました。これは生物学的な脳発達には養育環境の応答性が不可欠であることの証明であり、今トピックとなっている遺伝—環境相互作用研究の端緒となる研究です。

エムディはスピッツの研究を継承し、生態行動学的観察と精神分析理論を用いて、乳児が母親の「情緒応答性」を得ながら、人間存在の中心となる「情動的中核自己affective core of self」を形成していくプロセスについて研究しました。また「REV理論」を提唱し、子どもの心の発達には、R=Reciprocity（互惠性）E=Empathy（共感性）V=Value（価値）が大きな影響を及ぼす、ということを訴えました。

会長、渡辺久子は、エムディが1984年北海道大学教授三宅和夫先生との愛着理論の共同研究のため来日した際、出会い、その後1986年第3回WAIMHストックホルム大会に参加し、戦後の高度成長による日本社会の工業化がもたらした、家族機能不全と地域社会の崩壊から生じた累積的なトラウマを被った子どもを乳幼児期体験からやりなおす再愛着療法が有効であることを発表しました。

そのご縁があり、このたびの来日が実現しました。

またエムディとジョイ・オソフスキーJoy Osofskyによる表情認知を介した母親の情緒応答性の研究『I FEEL Pictures』では、慶応義塾大学小此木啓博士との共同研究もあり、日本とのつながりは深いと言えます。

エムディは、世界乳幼児精神保健学会（WAIMH）の創設者の一人であり、また精神科医や精神分析医として、長年にわたり国際児童精神医学会、国際精神分析学会で活躍し、新しい科学的知見をもたらしており、乳幼児精神医学と精神分析の橋渡しに大きく貢献した研究者・臨床家です。

また、親日家として、日本のいじめ、自殺、無気力、不登校、引きこもりの増加にもいち早く関心を示しています。現代の日本の子どもたちが持つ多様化し複雑化する問題の本質を考える上で、エムディの乳幼児精神保健を基盤とするたくさんの知見は大変役立つと思います。

幅広く乳幼児、学童、思春期の子どもらに直接かわる保育士、保健師、教員、また乳児院や児童養護施設のスタッフ、児童相談所職員、小児科医、産婦人科医、精神科医などの教育・福祉・医療の現場の方々だけでなく、未来の社会をになう子どもたちの政策づくりにたずさわる政治や行政関係者、また警察、裁判所などの司法関係者の方々のご参加をお薦めします。

＜アン・レヴィ先生の紹介＞

カナダマニトバ州生まれ、シンシナティ大学、テキサス医科大学精神科助教授、ローガンメンタルヘルスセンター、を経て2002年からコロラド大学精神医学科臨床医学教室教授を務めました。

長期的な個別心理療法、家族およびグループ治療、アルコール中毒患者、感情障害患者への治療など、様々な臨床のほか、医学部で学生への個人訓練、性的カウンセリング等を行いました。2018年からは、デンバーの精神分析学会総長として米国精神分析協会執行理事会にも参加し、長年、精神分析界に貢献しています。